

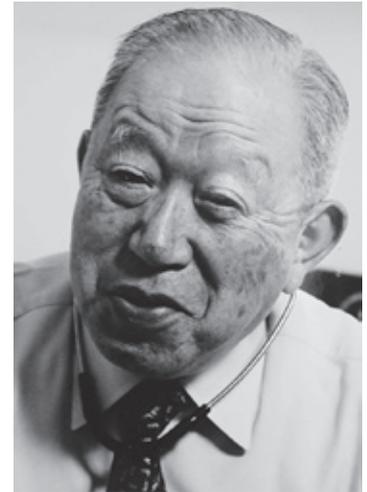
【追悼文】

和田壽郎名誉会員のご逝去を悼む

日本高気圧環境・潜水医学会 副代表理事 川嵐真人

2011年2月14日、本学会名誉会員の和田壽郎名誉教授のご逝去の報に接し謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生は1922年、和田禎純氏と靖子氏の長男として札幌に生まれました。1944年、北海道大学医学部を卒業、柳壯一教授の第2外科に入局された。終戦後の1949年、札幌にあった民間情報教育局の図書館で、米国では心臓病の手術治療が行われていることを知り、大きなショックを受けられた。1950年、ミネソタ大学に留学し、Wangensteen教授の下で南アフリカ共和国のBarnard医師らと早朝から深夜に及ぶ診療や手術に従事された。その後、ニューヨーク州立療養所、オハイオ州立大学、ハーバード大学で胸部外科を学ばれ、特にハーバード大学ではHarken教授の心臓手術に大きな影響を受けられたという。



和田壽郎名誉会員

1954年、札幌医科大学に35歳の若さでわが国初の胸部外科学教室を開設、初代教授に就任され、直視下心臓内手術を数多く行なわれた。1968年、胸骨翻転手術を考案され、わが国初の漏斗胸手術を行なった。1966年、Wada-Cutter弁を開発、これは世界初のCooley-Liottaの人工心臓4弁に使用され、現在ワシントンのスミソニアン博物館に展示されている。

1968年、日本で最初の心臓移植手術を行なったが、漢方医から告発を受けた。結果として不起訴無罪になったが、臓器移植に大きな波紋を呼んだ。多くのパイオニア医師が遭遇した苦難の道でもあったが、国際的な評価は高く、米国胸部疾患学会、汎太平洋外科学会、世界心臓胸部外科学会、世界人工臓器免疫移植学会などの国際学会会長を歴任し、世界中を駆け巡られた。

2001年3月9日、東京都新橋にある外国人記者クラブで行なわれた、日本で初の心臓移植を行った札幌医科大学名誉教授・和田壽郎先生の「神から与えられたメス」(メディカルトリビューン社発行)という本の出版記念会に招待されたことがある。これは2000年、国際潜水・高気圧医学会の機関誌「プレッシャー」の編集長から、高気圧医学のパイオニア和田壽郎先生について書くように依頼されたものが、2001年の1、2月号に掲載されたが、そのリプリントが参加者全員に配付されることになり、ひとこと挨拶するためであった。各国の大使館代表、大学教授、ジャズ歌手、落語家、福祉施設のシスターと大変多彩なゲストが二五〇人ほど集まったが、偉大な心臓外科医であり、パイオニアでもある先生の庶民的な人柄と豊富な人脈と人気の高さには驚かされてしまった。

高気圧酸素治療のパイオニアでもある和田先生は、1965年、北炭夕張炭鉱のガス爆発患者の熱傷に世界で最初に高気圧酸素治療を応用して、良好な成績を報告し、1969年には札幌で第4回国際高気圧医学会を主催するなど、国際的な活躍でも知られている。「神から与えられたメス」の中で、心臓移植を受けた患者は溺水治療のため高気圧酸素の治療目的で入院していた患者から心臓をもらい、移植後は83日間というそれまでの移植患者30人の中で9番目に長い生存であったことも明らかにされている。

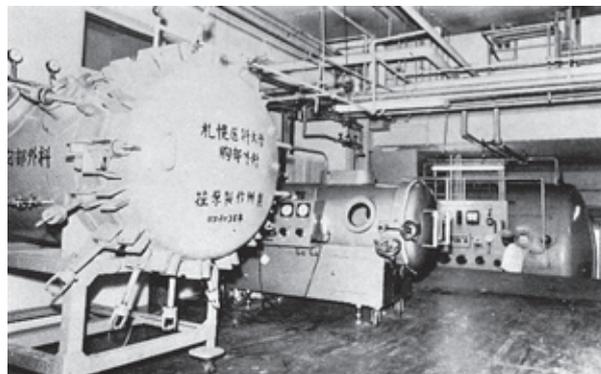
私と和田先生の初めての出会いは、1973年、カナダのバンクーバーで開催された「国際環境医学会」であった。当時、九州労災病院の天児民和病院長・九州大学名誉教授の指導で「潜水士の骨壊死」をテーマに研究しており、その発表のために出席していたが、生まれて初めての国際学会での発表であり、英語に全く自信のないときであった。

私の前に既に日本人5人の発表があったが、質問に対して回答できず、立ち往生が続き、そのつど和田先生が通訳されて、代わって答えるというシーンが続いていた。私の発表日の前日の懇親会で、和田先生は「日本人の発表はなっていない。英語ができないために討論ができない。明日の君の発表は援助しませんので、自分で責任を持って発表し、質問に答えて下さい」と言われていた。

これは大変なことになったと思っていたところ、カリフォルニア・骨壊死研究所のジョーンズ博士が「明日の発表はシンポジウムになっている。君が私の横に座れば、わかりやすい英語になおしてあげるので、心配しないで下さい」と救いの手を差し伸べてくれた。「捨てる神あれば拾う神あり」だと一瞬思った。おかげでなんとか討論まで乗り越え、壇上を降りる時には拍手が沸いた。和田先生は真っ先に来られて、「よくやった。きちんと答弁して日本人の汚名をそそいでくれたぞ」と褒めて下さったときは涙が出るほどうれしかった。これに気をよくして、英会話に励み、毎年のように国際学会に行くようになった。その後、先生は国際学会でいつもユーモアにあふれたお話を聞かせて下さり、眞野喜洋代表理事や私たちとの長い交流が続いた。

私が前野良沢から福沢諭吉に至る中津藩蘭学者のパイオニア精神の研究をしており、4冊の本もすでに出版していることを御存じで、1994年に日本高気圧環境医学会を中津で開催した時もわざわざ中津まで足を運んでいただき乾杯の音頭をとって下さった。その後、私がお会長の務めていた中津市医師会主催の講演会にも来られて、心臓移植の歴史的意義について熱情あふれるご講演をされた。その上、村上医家史料館や大江医家史料館を訪れ、大変熱心に史料を見ておられたが、パイオニアの業績はパイオニアでなければわからないものがあるようで、苦労を共にしたような共感を持たれたようだった。先生のお話の中にも出てくるいつの時代においても患者さんのために命がけでがんばってきた医師たちの話は私を勇気づけてくれた。パイオニアの和田先生が八〇歳を超えても夢を持って挑戦しようとしておられる姿勢に中津の医師たちも皆感動していたことを思い出す。

日本高気圧環境・潜水医学会にも毎年のように出席され、名誉会員として含蓄のあるお話をして下さい、眞野喜洋代表理事を始め多くの会員と親睦を深め、その温かい人柄にはいつも感銘と尊敬を覚えていた。先生のご遺徳を偲び、先生の築かれたパイオニア精神を引き継いで前進することをお誓い申し上げて先生のご冥福を心からお祈り致します。



札幌医科大学の高気圧治療装置



中津市医師会で講演後、当院の高気圧治療装置を見学される和田ご夫妻